

# 山のたより

2013/01/01

34



「ある朝、一面雪景色」



# おな〜り〜い! Vipすぎるお客さま

平成24年3月10日

山のたより  
号外!



## 高円宮妃殿下御来訪

高円宮妃殿下は、バードウォッチングが御趣味のようだ。妃殿下は、3月10日神戸下向の折にバードウォッチングをしたといふ所望。すぐ、「全国野鳥の会」が動いた。「全国野鳥の会」の会員である榎家の鈴木さんは、会の理事長の要請を受け、「鳥原貯水池」周辺路御案内の光栄に浴することになった。お忍びではあるが、御召し車輦、警護車輦、その他の関係車輦等、駐車場の確保、お休み、ご休憩処など、「お上人さん、お願いします」と協力要請。光栄の至りだ。当日、八畳のお座敷を妃殿下用に、本堂の座敷をその他の関係者用にと準備していた。妃殿下を玄關で御出迎えし、お座敷に御案内して、妃殿下が「わあーおひなさま」と入室すると、みんな同じ部屋に無理矢理入ってしまった。狭い座敷にウジャウジャ。もう、ごったがえし。こんなはずじゃなかった。いろいろなお世話になります、こう言ひ者です。廊下でウロウロしていた品のいい男性、私をつかまえ、「出雲大社宮司」と書いてあった。ご一行が駐車場に向かった後と差し出された名刺を見ると、「出雲大社宮司」と書いてあった。あわてて「お手洗い貸してください」と入ってきた品のいい老人は、生田神社の宮司さんだった。その日早朝から、ハイキングスタイルに変装した大勢の刑事が、水源池周辺、お寺の周辺等随所に配備され、厳重警戒していた。妻と二人で「孝彦、絶対捕まるで」とほくそえんでいた。副住職の孝彦はいつものように、自宅マンションからお寺に出勤。怪しいヘルメットとチャライバイクで爆音をたてながら、猛スピードでお寺に近づくと、案の定刑事に止められた。「ハイキングの兄ちゃん、いきなり警察手帳出してなあ、びっくりした」。奇しくも、その日住職の誕生日。

3/10

## 住職誕生日 ついに号外発行



横山さんは、「ん？」と一瞬食いついたが、ニヤツと笑って無言で（またあー、お上人さん……）私の目を見つめる。「ちがうちがう、合成やないって!」昨年二月になってから、いつも男性二三人連れでやって来て、何をしてもなく境内をあちらこちらと見て廻っている様子。何回も同じようにやって来るうち、私に出くわした。「どちらさん?」「あ、すみません。兵庫県警の者です」と警察手帳を見せた。「えっ、刑事さん?何かあったんですか?」「実は、今度宮家のさるお方がお出でになるもんですから」後日、榎家の鈴木博さんから電話がかかってきた。こうだ。高円宮妃殿下が公務のため神戸に下向されることになっているが、妃殿下はその後お忍びで趣味のバードウォッチングをしたいといふ所望あそばされている。すぐさま宮内庁官吏は、全国野鳥の会に連絡を取った。宮様お伴の榮に浴することになった全国野鳥の会の会長は、全国野鳥の会名簿から地元神戸在住の会員である鈴木さんに白羽の矢を立て、案内役を依頼したといふことである。日頃から年中首に双眼鏡をぶら下げ、鳥原貯水池を散策しバードウォッチングしている鈴木さんは、「名誉なことですからねえ」と受話器の向こうから、興奮を隠せない様子が伝わって来た。是非とも、自分のライフフィールドとしている鳥原貯水池を御案内申し上げたいし、その上で、どのように御案内するか毎日イメージし、シュミレーションしていると言う。そうした中で、「当日、雨が降った場合のこともありますし、女性ですから特にトイレの心配もありますし、ずっとお歩きになる訳ですから御休憩処も必要でしょうし……、と言ひことでお上人さん、ご協力戴けないでしょうか。行守寺さんにお立ち寄り戴き、お休み下さるように言うてますので」私はもう、二つ返事。こんなことから、兵庫県警の刑



神戸  
新所



「宮様お踏み付けのジャリ」ご希望の方には、おすそわけします。先着5名限定。



事さんが、毎週のようにやって来るようになった。お寺の境内だけでなく、もちろん鳥原貯水池の回遊路沿いの草むらからゴミ箱、ありとあらゆる処を隅々まで。

「うちに宮さんが来はるんやでえ、えらいこっちゃ」

「名譽なことやんなあ。一般お寺で、こんな事まず無いでえ」

いつになく晩酌がすすむ。

「どうする？」

「どうするって？」

「宮さんがやなあ、下にいー下にいーちゅうてやって来る訳や、前を通り過ぎる訳やないでえ、うちに来はるんやでえ」

「解ってるちゅーねん」

「金があつたらなあ、総ヒノキでドーンと御殿を建てて、宮様お成りの間や。総ケヤキでバーンと門を建てたら、お成り門や。お成り門からお成りの間まで、赤ジュータン、どうや！」

「アホちゃう、こつちが呼んだ訳やないのに、フツーにしとつたらいいやん。もちろん丁寧に迎えせなアカンけど」

「は？」（えーっ？宮様やで宮様。そやのに、お前はそ程度？）舞い上がって

いる私の頭に冷水をブツかけられたようだ。

写真、左から  
檀家の鈴木さん  
高円宮妃殿下  
たぶん  
出雲大社宮司さん  
たぶん  
女性警護官か女官

「お成りの間やお成り門の宮様お迎え大作戦計画はお前に却下されたから諦めるけど、大掃除くらいは…、どんなものでしょうか？」

「そこまでせんでもええんちゃうの」

「そ、そや、なあ…」

住職、完膚なきまでに撃破され、意気消沈。もはや再起不能かと思いきや、

「あのさー、宮様お迎えするとなると、オレ第一礼装、かなあ。お

終えて、帰って来る年寄り集団に、東京出張に出かける私はいきなり暗闇から「おはようございまーす」と声かけられて、びっくりすることもあつたくらいだ。このジイさんバアさんたちは、いったい何時に家を出てんねん？

その日は早朝から、いかにもこれからハイキングに行きますと言う出で立ちの男性が貯水池の入り口付近を中心に、そこにさりげなく集合している。その男たちが、いかにも一般市民を装い、

「先輩、寒いッスねえ。温ったかい缶コーヒーありますよ、いかがですか？今日の警護対象要人、あのー、コウエンの宮？さん？…」

「アホかおまえ、読み方知らんのか。あれはなあ、タカ…、タカ…、マルや、タカマルの宮さんや、よう覚えとけ！恥かくぞ」

「先輩、すごいッスねえ。AKBのメンバーなら、全員知ってるんですけどねえ、あいにく宮家に親戚ないもんで…」

「アホッ、ワシかて親戚にそんな偉い人おらへんわ。あ、そう言えば、鳥取のヒイじいさんが、町内会の副会長…、副会長見習いやったかいな、そんな事聞いたことあるわ」

「偉いッスねえ。毛並みいいッスねえ、センパイイ！」

「今度飲み连接到ってやるわ。メンバーズ『香代』、行ったことあるか？美人ママやでえ」

「ぜひぜひ」

〈ピーッ、ピーッ。本日のタカマドの宮妃殿下警護大作戦、作戦開始までと

前は、もちろん和服やろ？」

「なんでやねん、着物なんか着いひんよ」  
(7ページに後日譚)

「……」

服装も完敗。気を取り直して、

「プライベートのお忍びとは言え、お側付きの女官、身辺警護の私服警官、日本野鳥の会の関係者、助さん格さん、その他大勢、全員が中に入つて来ないにしても、部屋割りどうすんねん」

「宮様とお側付きの人だけお座敷、他は全員本堂ッ！それしかないやん」鶴の一声で、即決。

「はいッ！」

かくして、当日を迎えた。

四角い部屋を丸あるく掃いて、大掃除終わりッ。蓋付きの茶碗用意して、紫の座布団出して、テーブルに花飾って、はい終わりッ。

「ほんとに上がって来はんのやろか？」

行守寺は鳥原貯水池のちよつと高台に位置するが、まあ、「湖畔の寺」と自慢しても虚偽罪で逮捕されることはない。

その貯水池は神戸市街から急な坂ではあるが、歩いてすぐ。市民にとつて格好のプチハイキングコースとあつて、特に一億総健康指向の昨今、日曜日でなくても、老若男女が暗いうちから散歩を楽しんでいる。一口に暗いうちと

言っても、そんなじよそこらの「暗いうち」ではない。三宮で飲みすぎて、千鳥足で帰る頃の「暗いうち」である。未だ明けやらぬかわたれ時にはもう散歩を

一時間ちようど。全員スタンバイできてるか？

「先輩ッ、今の警察無線、隊長は、タカマドって言うてませんでした？」

「円はマルや、マドは窓ちゅう漢字やろ」

「そうですよ。あ、先輩、コーヒーの空き缶、捨てときますわ、ください」

「もうそろそろ時間や、持ち場に帰れ」  
「ハイッータカマル、でしたね」

時間が経つにつれ、男たちは耳に手を当て、イヤホン越しに指令を受けている仕草が、頻繁になつてきた。そんな行動も、前を通りすぎる市民に悟られないように、いちいち気を遣っている。いつものように散歩にやってくる人たちは、そこに佇んで貯水池の風景を満喫している若者が、懷中にピストルをひそめた刑事であるとは知る由もない。高円宮妃殿下の鳥原貯水池御来訪が公式行事なら、赤色灯を回した白バイとパトカーが先導して、皇宮警察の車輛に囲まれながらお出でになり、その間、厳重な検問が行われるところだが、非公式のお忍びとあつては、そんなことは出来ないらしい。とは言え、宮様である。警察の威信にかけて、不測の事態は絶対に許されないのである。ハイキングスタイルのカメレオン刑事たちは、貯水池に登ってくる市民を止めて、全員ではないようだが職務質問している。宮様お迎え準備態勢が整い、後は本番を待つだけの住職は、暇つぶしに久遠堂の回廊に立ち、腕組みしながら職務質問現場の様子を見下ろしている。どうだろうか？やはり見た目怪しいヤツが一番か、チャライバイクに乗ってるヤツは絶対なや。ムダに贅肉付いてるヤツもひつかかるな。ん、待てよ？ソレって、副住職ドンピシャやん！

副住職の孝彦は、この時点でまだマンション生活している。毎朝、長男を幼稚園に送るなどして行守寺に出勤。四輪と言いい二輪と言いい、ノーマル仕様ではバイクを買い、良好な部品

り出しそれを寄せ集めて一台のバイクに仕上げて乗っている。見た目といい音といい、目立たない訳がない。そしてフルフェイスのヘルメットに、色とりどりの出で





# ホレミー、みてミー！

また、食事会？別々のグループで、それぞれ定期的にやっているから「エッ、またあ？」となる。おばちゃん達がランチや夜の食事会すると言っても、オッサンののはしごスナックに較べ、たいしたことではないし、別に不満がある訳ではない。「どうぞどうぞ」と自ら運転手も買って出て気持ちよく送り出しているのだが、そんなしょっちゅう合って、よくしゃべるネタがあるなあと、不思議に思うだけである。そう言う、「なんぼでも話が尽きない。もっと時間が欲しいくらいよ」と言う。

「ちょっと、聞いて聞いて。この前ねえ、箸が転んだのよ」と言って1時間。「私もスマホにしたわよ」「私も買ったけど、使い方解らへん」と見せ合い大騒ぎして1時間。「うちの主人てね、頭洗わへん、パンツ換えへん、オナラ連発」「うちも」「うちもよ」と、けなし合い1時間。

いつもの食事会はおそらくこんな内容だろうと推測されるが、今回妻は、有史以来後にも先にも絶対無いし、誰も経験したことがないビッグニュース・衝撃ネタを携えての登場である。件の宮様御来訪。一刻も早く会場に到着し、早くみんなに言いたくて、自慢したくて、「運転手さん、もっと飛ばして」と言ったはずである。絶対言ってる。

「ちょっと、うちね、この前すごい人來はったんよ。誰やと思う？絶対当たらへんと思うわ、すごいお方よ」

妻は、あの時の様子を再び思い起こし、興奮を抑えきれない上気した表情で極上ネタを披露し始めた。

「エーッ？誰やろ？……政治家？」

「有名人？」

AKB48？AKB58？小沢一郎？橋下徹？渡邊照敏？金正恩？さんま？叶姉妹？森下竜浄？平山香代？松竹フキ？あ、判った、宮崎修……、でしょ？

「ぜん一ぶ、ブーッでした」話題の中心にいる妻は得意満面のご様子。

「実はねえ、宮様がお出でになったんよ、宮様」

一同「ギョエーッ！」

「み、み、宮様？宮様が來はったん？ユッちゃん、すごいやん！」

ユッちゃんがすごい訳ではないが、衆目を集める中で、件の顛末を語る妻は鼻高々になるのです。

「大変やったんよ」

「宮様やったら、フタ付き茶碗を高杯に載せて出したりとか、一張羅の着物でお出迎えとか、したんやろ？」

「着物なんか着いひんよ、フツーでいいやん」

ユッちゃんのこの一言が、おばちゃん軍団の逆鱗に触れたようだ。

「ユッちゃん、あかんでえ。宮様の前では着物きな。私やったら、着物新調するわ。何やとん？」

一同「そやそや！」凶らずも集中攻撃を受けてしまった。

この食事会の後、帰って來たユッちゃんは開口一番「お父さんの言う通りやったわ、着物着なあかんで、美江ちゃんに怒られちゃった」

ホレミー、みてミー！



こんなはずじゃなかったのに……廊下もごった返し。

立ち。ウツヒツヒ、あいつ絶対捕まるぞ。「ポリさんに止められたわ。オレここのお寺の息子やちゅうねん」案の定、職務質問された。こんな現実を迎えながら、「ほんまに來はるんやろか？」と、まさか宮様が御来訪になるとはまだ信じられない。夫婦して、ソワソワ落ち着かないでいるところへ、私のケイタイが鳴った。鈴木さんだ。「今から行守寺さんに向かいます」「さあ、台風が來るぞ、全員配置に付けえーッ！」妻は「ハイッ！」と敬礼して、助っ人に呼んでいた妹と一緒に、台所に走り出した。ミスがあつてはならないと、この日のためにJRナンバーワン運転士・ジューフーの特訓を受けていた「指呼確認」を二人でやっている。「エーッと、どうやったかなあお姉さん？どうやったかなあ？」「あんた、なんで小指やねん！人差し指やろ？」「そやそや、こうやな。湯呑みヨシッ！茶托ヨシッ！湯加減ヨシッ！」「湯加減？間違いやないけど、お風呂ちゃやうやろ？」今度は、お座敷に行つて「指呼確認」「テーブルヨシッ！座布団ヨシッ！」「ちよつと待つて、あなたーッ。座布団、赤？紫？どつち？」「うーん……、知らん！」いよいよ御一行様の御到着。黒塗りの高級車の車列。夫婦で玄関に正座して待機していると、「こんにちわ」と満面の笑顔で宮様が入つて來られた。全く初めてのことで、宮様に対して、どんな言葉遣いでどんな風にお迎えしたらいいのか、直前まで考えていたのだから思いつくはずもない。「ようこそいらつしやいました。お待ち申し上げておりました」これが、精一杯だった。

うあーッ、えらいこつちゃ！「宮様はこちらへ」「皆様は、本堂の方に控室をご用意しております」と引き離し工作を図つたのだが、宮様を取り巻くおばちゃん達は、「私達も宮様と同じ部屋がいい」とドあつかましく、ドヤドヤツと入つて來た。なんやねん！コイツら。こつちは何遍も予行演習してんのに、ハラタツツ！

どうもこのおばちゃん達は野鳥の会会員かその関係者だろう。その中に何人かいる若い女性は婦人警官と女官だろう。緊張感が感じられる。「どうぞ中でお茶を」と勧めても入つて來ないで、寒さに肩をすぼめながら外で待機している男達は、たぶん警護官のようだ。みんな私服なので判らない。

もう子供たちも皆結婚して別所帯。今では老女の妻と二人だけの生活なのだが、まだ雛段飾りを毎年出している。そのお座敷に宮様をお通しすると、「わーッ、お雛さまーッ！」と歓喜の仕草を全身で表し、声を挙げられた。さすが宮様、こちらがお席にご案内するまでもなく、さつさと床の間を背にした一番の上座に向かい、用意した座布団にお座りになったお姿は、にこやかで背筋をピンと伸ばし楚々としていた。

もう計画していた段取りも何もかも、あつてなく雲散霧消してしまつた。行守寺のお座敷に宮様がお座りになるなんて、お寺の歴史上最初に最後だろう。凜とした映画のワンシーンを思い描いていたのに、グッチャグチャのてんやわんや。宮様には格調高く小笠原流でお茶を差し上げたが、その後は、お茶をまとめて出したり、トイレの案内したり、お座敷も狭い廊下もごった返し。





# 変わりゆく本堂①



## 仮本堂解体の記録

### 自分たちで

### やっちゃった！

もともと、何事につけ、他人様がしないことを敢てやりたい性分である。それに加えて今回は、自分でやったら、その分出費が抑えられるだろうと言つ二石二鳥をもくろんだ。

とは言え、仮設本堂と言つても大きな建造物には違いない。

そんなものを自分で解体しようと思う人はまずいないだろうし、解体屋さんにやつてもらふモンだと思つのが、普通。

しかし、どう考えても、そんなに難しいことではないし、専門技術を要することではない。

慎重に、手間と時間と労力さえ惜しまなければ、絶対出来るはず。

そして、「おもしろそうやん！」

大掛かりな挑戦に、随分逡巡したりしたが、自分たちで、やっちゃった。

# 100年に一度の大忙し

本堂解体を自分でヤル

庫裡リフォームのために、家中の荷物大移動

このクソ忙しい中、妻はケガで入院

息子の家族には二人目を授かった。幼児扱いが苦手な私でも「ちはるちゃん！」と声かけると、ワンテンポ置いてニコッと笑顔を見せてくれる。かわいいなあ。世間が、孫は目に入れても痛くないと言うから、「ホントかなあ？」って、誰もいないところで入れてみたら、痛いのかんのって。あんなことするもんじゃねーよ。よい子は、決してマネしてはいけませんよ。



何年も前から、一緒に住めるように早くリフォームをと話しながら、ダラダラと時が経ち、兄ちゃん、ワンパクざかりのもうすぐ一年生。本堂再建がいきつかけとなつて、庫裡の二世帯リフォームもするこ

うちもご多分にもれず、何十年も押入れの奥に、戸袋の奥に、納屋いっぱい、大量の死蔵した不用品が眠っている。数年前に、おばあちゃんが亡くなった時、その娘である妻に、「今思い切つて捨てないと、オレ達が死ぬまでタンスの肥しだぞ」と、ばあちゃんの遺品整理を促した。「そうね」と、本人は思い切つて《断・捨・離》を実行しようとしているのだが、コレはもったいない、ソレはもう少し置いとこと、全くとつていいほど元のまま。加えて、四十年前に亡くなった先代住職の衣装、その前の代の遺品など、タンスの奥やら、大量の衣装ケースが納屋の奥やら、「どーすんの？」

「オレに任せてくれたら、トラック借りてきて、全一ふ

市の処理場に行つてやるけど、どうや？」

「そんなことできひんわあ」

八月下旬とは言え、まだ酷暑真つ盛りである。連日、朝から夕刻まで、二リットルペットボトルの水とお茶の消費量がすごいことになった。こうして、「宮様お成りの間」も天井までぎっしりと詰め込んだ荷物によつて、倉庫になつちやつた。リビングも他の部屋も、足の踏み場もないくらいになつたが、取り敢えず、寝るスペースだけは確保しとかないと。

なんとか二階は工事ができるようなつたが、二階のリフォーム工事が終わる折、又あー荷物の移動？考えるだけで、気が遠くなつちやう。



こんな妻の引き伸ばし作戦もはやこれまで。全面リフォームをすると決めてから、家事の合間にボチボチと整理に取りかかつていた。

工務店の米林社長が「まず二階から工事にかかります」と言うので、二階の荷物を全部一階に降ろすことになった。二階の引越しが完了しないことには工事が始まらないと言う理屈は解つていながら、「えーッ？二階の荷物を全部、下へ？」想像するだけで憂鬱になる。そんな私を見て、お盆の法要が終わると次の日から、「お父さん、こんなモンな、エイッ！ヤッ！つて、やつてまわないと、いつまでも出来ひんで」と、さつさと息子がやりだした。



暑ッつーッ！

工事現場のプレハブ小屋とは全然グレードが違うが、それにしてもプレハブ構造には違いない。阪神大震災による本堂倒壊を受けて、急遽プレハブによる仮設本堂を建てて、もう十七年が経つ。

やっと本堂再建が決まり、少ない再建資金を目減りさせないようにと、私の趣味も相まって、本堂解体を自分の手でやることにした。誰もが「エーッ!？」と絶句する。

お盆施餓鬼がプレハブでの最後の法要となった。その後何日かおいて、御本尊遷座と解体安全祈願の法要をするのだが、私は、日蓮宗兵庫県夏期講習会、近畿教区所長会議、副住職は、東北への災害復興ボランティアなどで「お父さん、もう八月三十一日しか、日とれへんで」と言うことになった。

副住職の若い仲間達数人に御出仕を戴いたが、カンカン照りの猛暑。もともとエアコンなんか付けていなかったのだが、仲間の若いお坊さん方に来て戴くの、せめて扇風機をかき集めて、なまぬるい風でもおとてなしと準備を進めていた息子が、「お父さん、どのコンセントが生きてるん?」と訊くから、「本堂はもう、元から切ってしまったで」と言うと、息子は滴り落ちる汗を拭きながら猛然と怒り出した。

「なんで切ってしまうんや! 今日法要すること分かるとるやろ、ちよつと考えや!」ブンブン怒っている。

「……」

夏、暑いのはあたりまえ、ちよつとぐらいガマンせーや、と言いたかったが、あまりの剣幕にたじろいで、不覚にもうなだれてしまった。

「何とかなんの?」と言うから、慌ててありったけの延長コードをかき集め、庫裡のコンセントから数十本繋いで急場を凌ぐことはできたが、本堂の床は端から端まで延長コードだらけになる始末。

「老いては 子に従え」と言うほどまだ老いている訳ではないが、これからは、なんでも息子の意見を聞いてしなれば、と言う教訓が残った。





## 変わりゆく本堂②



「ここからここまで、深さ五十センチ掘って」「ヘイッ、親方。ガッテンだ!」「材木、十本」「わかりました、親方」と言って、本堂の角材を慎重に外し、釘を全部抜いて揃える。

「外壁材、八枚、きれいに剥がしてや」外壁材は木材と違って、重い。それに、もろいので、よほど慎重に外さないとい、折れてしまう。こうして、来る日も来る日も、建材調達するのが私の役目だった。

さすが、プロ!窓もドアも全ての建材が捨ててしまう材料で、本格的な建物が出来上がった。みごとに腕だ。



さんが作業をしていた。

「あ松木さん、来てくれたんですか。松木さんにそんなことやってもらうのはもったいない、仮設トイレ造ってください」

年中行事は休まずやるし、庫裡のリフォームに大工さんも毎日来ている。そんな中、トイレを解体出来ずに困っていたところだった。檀家の大工さんが来てくれたことは、渡りに舟。私も手伝うから、「建築廃材だけで」とお願いした。

「長くて二年ほどの仮設トイレですから、雨露しのぐだけでいいですよ、ザツとでいいですよ」

「そんな訳には行きまへんで、本職がやる以上。これがプロの仕事かと、笑われますやん」

こうして、親方の松木さんと大工見習いの住職の二人三脚で仮設トイレの建築を始めることになった。

## 始め一ツ!

法要終了後すぐ、檀家の人達と一緒に本堂にあった荷物を久遠堂に移した後、壁板、天井板を剥がしたり、照明器具を取り外したりして、解体作業の第一歩となった。



この日から、私も息子も本業の合間にほぼ毎日。初めの頃は、垣原さんが毎日来てくれて精力的に解体を進めてくれた。とは言っても、本体の解体はまだまだ先のこと。本堂の付帯建造物として、宗務所事務室があり、トイレがある。特に宗務所事務室は、私が宗務所長になつて急遽増設したもので、ツーバイフォーで建てている

ものだから、壊すのも簡単ではない。解体を始める時に、「建築廃材を日曜大工に使いたいから、なるべく丁寧に解体してね」と言ってるもんだから、垣原さんも丁寧にやっていた。一緒に作業していた私は、ツーバイフォーは頭丈だけに釘だらけであることに気づいて音を上げた。「こんなモン、丁寧にやったらいつまでたつても全然進まん。荒っぽくブツ壊そう」と、ユニボで一撃。梁にツメを引っ掛けて、バリバリ

バリッ!これに限る。

日曜日に秋田さんが「手伝いにきました」と、フラッと来てくれた。

「秋田さん、コンクリート削岩機使えるか?」「エッ、そんなモンであるんですか?お上人さん、私箸より重いモン持ったことないですよ」

今度は、松木さんがやって来た。もともと、自分の都合のいい時間にやって来て、都合のいい時間に帰るように、檀家の皆さんに伝えてあるので、勝手にやってもらっているのだが、ふと本堂に行くと、松木





## 変わりゆく本堂③



**11月18日** いよいよ鉄骨構造を分解する日が来た。  
これまでに、来る日も来る日も、腕組みして何度見上げたことだろう。素人の手で、屋根を支える底辺の長さ三間の三角形構造体、これをどうやって降ろすか。クレーンを諦めた以上、  
長い単管で 三脚を組んでチェンブロックを取り付け、  
この方法しかないと思ったものの、やったことがないだけに「ウーン……」と唸る。

当日、私と息子を含め六人の少数精鋭部隊。隊長はもちろん、ブツさん。一番の年長ではあるが、その引き締まった肉体、豊富な知恵と経験、俊敏な動作、

まだまだ若いモン以上で、頼りになる親方。西やんとヒロくんは息子の遊び友達で、ラ

チェット使いの名手。年中ボルトとナットを締めたり緩めたりして油まみれ。マ

ギーは長女のダンナで演歌に酔いしれる祭ラー。「パパの車に乗ったら、ずーっと演歌聴かせらんねん」とこぼす長女。

「高い所が苦手という人、手を挙げて」

「ハーイ」と名乗り出たのは、西やんと

息子。その理由たるや、身体上の理由と

言う。なるほど見るからに、屋根上で軽快

に動き回るような体型ではない。早い話が、

ブーちゃん。

「かかれーッ！」隊長ブツさんの号令一下、隊

員はそれぞれの持ち場にすばやく移動し、作業

を始めた。屋根上に配属された鷹隊員は、一斉に

屋根のトタン板をはがすことから始め、お昼までに、

屋根下地材のコンパネの撤去で青天井が見えるまでに進ん

だ。

昼食をはさんで午後、いよいよ解体の山場である、鉄骨構造体の吊り降ろしにかかる。一斉に何百箇所もあるボルトを緩め始める。屋根の鉄骨にまたがった若い衆の声が飛び交う。

「だれか、ラチェット取って」

「サイズは？」

「十七や」

「よっしゃ、投げるでえ！」と、放り上げる。

屋根のそこかしこで、「カチャ、カチャ、カチャ」とナットを緩める金属音が鳴り響いている。

## 変わりゆく本堂④



さあ、ヤロカーツ！

常識の力べを突破した六人衆



柱も、ドアも、窓も、内装材も、  
外壁材も、便器も、みんな廃材で  
造ってもらった仮設トイレ。  
さすがプロ。



神戸市街地を眼下に、  
天空で作業するブッさん。

「親方ーッ！  
怖くないですかーッ？」

「神戸ー見晴らしいけどなあ、  
足がすくむでえー！」

「ドライバーの電池切れそうや、  
誰かスペアー取ってくれや」

「電池のスペアー、  
投げまっせー、よろしいか？」



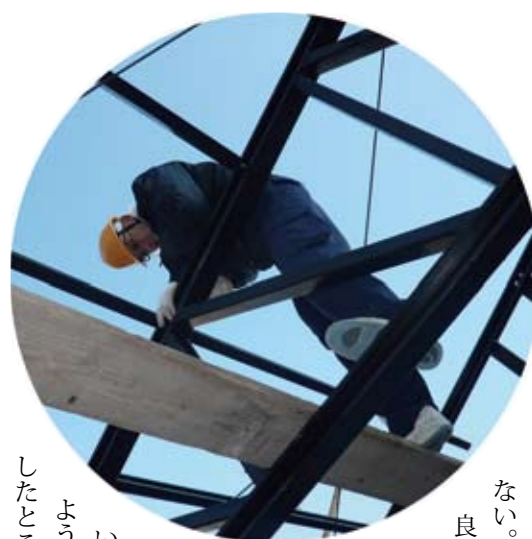
屋根から、次から次と放り投げられる剥がしたブリキの  
屋根材を、地上部隊が、トラックに積みやすいように折  
り畳んでいる。大変な力仕事だが、膨大な量であるだけ  
にいつまでもやっても終わりが来ない。



この仕事、腰にくるなー。  
一列やっただけで、汗ビショリになるわ。



下で、鉄骨吊り下げ用の三脚チェンブロックの組み  
立てが始まると、これからは、今までと違った  
危険が伴う作業になると言う思いからだろう  
か、いっぺんに緊張の空気が漂ってきた。  
親方ブッさんの声が飛ぶ。  
「マギーは、もちよつと右や。きれいな  
三角錐にせんと荷重が一本の柱にかっ  
てまうから危険やぞ」  
「親方ーッ、ボルト全部はずしました。降  
ろしていいですかーッ？」  
「ヨーシ、慎重にいけよーッ！真下におつた  
らアカンでえー！」  
そろりそろり降りて来た。「よーし、その調子」  
固唾を飲んで、何事も無いようにと心中願ったもの  
だった。



大成功！思わず手をたたいた。  
自分達の手でやると大見栄を切り、「大丈夫うーッ？」と冷たい視線を受け  
て来た手前、失敗する訳には断じていか  
ない。いやー、良かった、ほんとに  
良かった。  
更にもう一体、難なく降ろし  
た。

コツもつかめたし、もう  
同じ手順で作業を繰り返す  
だけだが、日も暮れてきた。  
調子が出てきたところで止  
めるのは惜しいなあ、もう一  
本降ろしたいなあ、と思っ  
ている私の胸中を見透かしたかの  
ように、「もうちょつと、と欲を出  
したところに危険が潜んでいるからね





## 変わりゆく本堂⑤



今日の作業、終了。そこかしこに散乱している工具を集めて一服する頃には、どつぷりと日が暮れてしまう。「秋の夕暮れはつるべ落とし」とはよく言ったものだと実感する。そして、冷たい風に枯れ葉が舞う。

十一月二十五日、私も息子も午後三時ごろ帰宅した。本堂は、鉄骨アングル最後の一本だけ残して、かろうじて建っている状態である。  
「日の暮れまで少ししか時間ないけど、どうする?」  
「お父さん、やってまお!」  
しかし、二人だけでは三脚も組めないし、どうしようかとあれこれ考えた挙句、落としてしまうことに決定。両端のボルトを全部はずし足で蹴つたら、「ガシャーン!」と、ものすごい轟音で落下した。計算どおりだ。一件落着。

## 変わりゆく本堂⑥



こさ移動できた。今日は三人だけなので、動かせる訳がない。ところがドッコイ、田沼さんはガスバーナーを積んで来ている。  
「田沼さん、三ツつに切つて」  
「はい、わかりました」  
おかげで、いとも簡単に鉄骨を切断して軽々と運ぶことができた。

え」と含蓄のある教えを垂れる老師ブツさん。とつぷりと日も暮れたところで、記念撮影。翌朝、「おはよう」と息子がやって来た。「やれば、出来るモンやなあ」  
二人とも、昨日の達成感と充実感が残っている。「あと八本降ろさなアカンけど、誰か助っ人頼むか?」  
「お父さん、二人だけでイケルで。コツ掴めたり、手順も分ったしなあ」  
昨日は六人でやったのに二人でやれるかあ?と思つたが、お、随分積極的やし、頼もしいこと言うやん、と感じたものだった。  
互いに、お参りの仕事を終え、さあ、始めよか、と言う折に、田沼さんがやって来た。  
「田沼さん、いいところに来てくれた」  
僅か三人だが、びつくりするほど順調に作業がはかどり、スムーズに鉄骨を降ろすことが出来た。昨日は、降ろした鉄骨を六人がかりでやつ





# ハチのムサシ

VS

## 権僧正武蔵

### 台所の決闘

ハチのムサシはどこで、どうして、だれにやられて死んだのか、その真実に迫る



「デッキすずめバチ、5cmくらいあったよなあ」と親指と人差し指を広げる。「あなた、大げさねえ。5cm言うたらこんななんよ。そんな大きなハチおる訳ないやん」と、妻も指を広げる。「ほんなら4cm、これくらいか」と少しだけ譲歩するが、指はあいかわらず大きく開いている。

ほらふきキョーシンに呆れた顔の妻は、クスクスッと笑いながら大きく開いた指に自分の指を重ね閉じようとするが、離れた反動で更に広がった。

あれからしばらく、息子や娘、その家族らが来る度に武勇伝は語られ、その都度エスカレートする。

「宮本武蔵はハエやろ？オレはハチやでえ、ハチ。しかも5cmのダゴバチ、どや？とうとうオレも、宮本武蔵を超えたか」

夏に入る頃から、勝手口の上の小さな穴に、でっかいハチが時々出入りするようになった。案の定、盛夏から秋の終わりまで、頭を低くして最大級の警戒をしながらでないと勝手口に入入りできなくなった。

妻が入院し一人暮らしともなると、弁当買い出しに行かならんし、パンツ届けなあかんし、あれこれ用が多くて注意も怠る。



百回目だ、文句あつか？  
それにしても、勝手口周辺はスズメバチが益々乱舞していて、非常に危険な状態。

こう言う人尊敬しちゃうよな」

子供の頃は野山で遊んでいた  
ので、ハチに刺されることはそんなに珍しいことではない。実際何回も刺された記憶があつて「オレには免疫があるので、どーってことねえよ」と言う、周りが口をそろえたように、「お父さん、二回目が危ないらしいで、病院行ったら？」と言う。オレは

「お父さん、保険所か業者に頼んで、なんとかしてよ」

「オレが退治してやる。復習の鬼となって、ヤツらを皆殺しにしてやる」



「そんな危ないこと、頼むからヤメテ」  
ジェット噴射のハチ用殺虫剤も、遠くからでは効果なかった。夜、ヤツらの一家団圓を狙って、天井の点検口をわずかに開け、隙間から噴射してみた。寝込みを襲われたヤツらの慌てふためく音がすごい。何百匹かのハチが一斉に天井裏で乱舞すると、天井裏で共鳴し、その音たるや恐怖の轟音だった。確認できないが、少しは死んでるだろう、ざまあ見やがれ。

入ったら出られない仕組みの容器に、ハチの好きな液をタప్పリ入れて外に吊るしている。工事中とあって、そこを頻繁に通る水道屋さんも足を止め、ハチが入る瞬間を見たいと長がーい時間待ってたそう。けっこう収穫はあったが、一族何百匹何千匹の数からすれば、目標の皆殺しにはほど遠い。

あの手この手復習の殺戮を続けるが、夏真っ盛りの活動期。焼け石に水のような。妻も退院して、やっと二人で夕食を共にするようになったが、しばらくするとハチが台所に乱入するようになった。夕食時にハチが入って来たら、さあ大変！二人とも、箸を置いて頭を低くし、臨戦態勢でハチを目で追う。妻はまだ松葉杖で、サツと身を交わせない状態。

復習の鬼に火が点いた。新聞紙を丸めて、たたき落とそうと奮闘するが簡単には当たらない。長がーい時間、台所を右へ左へドタバタしてやっと勝利を



収め、再び食卓に付き、冷たい夕食。  
これが毎晩続くようになった。『どこから入ってくるんやろね』限なく探してみたが、全く判らない。

ある晩、一計を案じた。「テレビ消せ！電気消せ！」部屋を暗くし、流しの上の小さな蛍光灯だけにすると、案の定ヤツはその蛍光灯に止まるようになった。ちょうど目の高さにある。決死の覚悟で割り箸を持ってソーッと近づき、チャツと挟んですぐ下にある洗い桶の水に沈めた。ヤツター大成功。ヤツは、洗い桶の中で溺れ、もがき苦しんでいる。「どうだ苦しいか？もがけ、もつと苦しめ。イーヒッヒッヒ！」

オレは悪魔か？胴体を箸に挟まれたヤツは、水の中で両手両足をバタバタもがいているが、だんだん動きが鈍くなり、とうとう動かなくなった。こうしてヤツの溺死を確認して、そのままゴミ箱へポイッ！

乾坤一擲、一か八かの大勝負に胸のすくような見事な勝利を収めたオレは、狂喜乱舞して舞い上がった。

「どうだッ！オレって、ワイルドだろう？かの剣豪、宮本武蔵は箸でハエを掴んだそうだが、オレはスズメバチだ。とうとう宮本武蔵を超えたぞ。どうだユッコ、惚れ直したろう」

「エライエライ、あなたは大統領。そんな調子に乗ったたら知らんよ、また刺されるから」  
左手を腰に、箸を持った右手を高く突き上げ、天空をにらみ鬼の形相で吼えた。

「ハチどもよ、よく聞け！選りにも選ってこのオレ様を刺そうとは運に見放されたか。先刻の世紀の一騎打ちを見ておろう、ハチのムサシは死んだのさ。オレ様には、天照太神・八幡大菩薩・一乗擁護諸天善神がついておる。貴様らの味方は閻魔大王であろう、勝ち目は無い。即刻、領空侵犯を止めて違法占拠の天井裏から退散せえ！文句が



# 雲海

夜半、山間部などを低気圧が通過して湿度が高くなったとき、放射冷却によって地表面が冷え、それによって空気が冷やされていく。ここで風の流れがない場合に、冷えた空気はその場に留まり、さらに冷却され続ける。やがて一帯が飽和状態となり、空気中の水分が霧となって発生する。このときの様子が、山頂などの高所からは雲海として観察できる。

鳥原貯水池



あるなら、東になつてかかって来んかい、皆殺しにしてやる」

自分が興じている田舎芝居に自己陶醉しているキョーシンは、この後予想だにしない恐怖の第二幕が始まるうとは知る由もなかった。

## 第二幕、ゾンビ

台所には再び平和が訪れた……、かに思えた。宮本武蔵夫妻は落ち着きをとるもどし、二人仲良く夕食を楽しんでいるのであるが、部屋の隅に置いてあるゴミ箱には、異変が始まっていた。

た。「ゴソゴソ、ガサガサ」小さな物音は、はしたなくはしゃぐ武蔵の武勇伝とテレビの音にかき消され、二人には聞こえていない。

しばらくして「ブーン」というかすかな音を頭上に感じたのは、武勇伝を冷ややかに上の空で聴いていたフリをしていた妻であった。「ん？」と天井を見上げる。

「エッ、また？あなた、また、ハチ」と昂揚した声。

「エーッ、またかあ？どこから入ってくるんやろなあ」

「あなた、さっきのハチ、ちゃんと出ないように袋とか、入れた？」

「出るも出ないも、死んだやないか」と言いながら、念のためゴミ箱をのぞいて見ると、ポイッと入れたはずのハチが見当たらないではないか。

「エエーッ？と言うことは、アレかあ？」と飛び回るハチを目で追った。

「ゾンビやー！」と仁王立ちに構えた武蔵の体内にはアドレナリンが急激に活発になり、血沸き肉踊りだし、闘争の炎が燃え盛るのを感じた。

「おー、いい根性しとるな。懲りずにまたオレ様に立ち向かって来る気か？受けて立とう、さあ、どこからでもかかって来い！」

腰に差した二刀流ならぬ二本の箸に、いつでも抜刀できるようにそつと当てた右手には火花が、ハチを凝視するすごい眼光にはそれを照射しただけで射落とす勢いが感じられた。傍らで、世紀の決闘に固唾を飲む熟妻は、松葉杖も忘れアングリ。

武蔵は、静かに眼を閉じた。研ぎ澄まされた五感で勝負に挑もうとしている。刻が止まったかのような静寂とブーンと張り詰めた緊張で、武蔵愛用のコーヒーカーップにピシッとヒビが走った。タマが失神した。

その瞬間閃光が走った、と同時に空気が動いた。その気配にそつと武蔵を見遣ると、眼を閉じたまま微動だにしない武蔵の右手には、箸に挟まれたハチが捕まっていた。……終わった。

「あなた、ステキッ！」

タマが息を吹き返した。

「武蔵と呼べッ、武蔵と！」

次の日から連日、ほぼ同じ時刻にハチ退治をするのが日課となった。そうして一週間ほどしたある晩、一匹捕まえたかと思うと、また一匹入って来ては捕まえ、こうして一夜に連続八匹。もう緊張もなにも無く、ただ機械的に流れ作業するほどに剣術の上達はめざましいものがあった。

「オレって、すごいなあ」







ずっと松葉杖していたが、  
「両手ふさがって、なんにも出来ひん」と、  
車付きのイスを購入して、  
家中「ゴロゴロ、ゴロゴロ」。  
一日中「ゴロゴロ、ゴロゴロ」で、  
テレビの音もラジオの音も、  
全く聴き取れない。  
「お父さん、撮るのやめてッ!絶対やめてよ。  
こんな格好、『山のたより』に載せるの。  
絶対許さへんからね」  
「写真、これしか無いねん」  
「ダメダメ、絶対ダメよ」  
へへへへ、もう手遅れ。  
載せちゃったもんね一だ。

ゆっ、骨折!

オレ、骨折!

ると、あと茶碗を洗わずにそのままポイッ! (これを知恵と言うのか、甚だ疑問でもあるが...) こりゃ、イイ。昼はコンビニ弁当で、夜は冷蔵庫をかき回し、忘れられた埋蔵食料を探し当て、これを肴に酒を飲む。こうして、何とはなしに河島英五の世界に感情移入してしまっているオレ、「ワイルドだろうー?」息子の目には、こんなカビ臭い光景、おそらく侘しく切ない感じでかわいそー、と映っているのだろう。

「お父さん、ヨメはんが、ご飯というんなおかずを持つてくる言うてるから」と、時々お情けを頂戴している。お一人さまの侘しい食卓も、その時だけは豪華で幸せ感を満喫することができる。

「あなた、ちゃんと食べてますか? # \$ % & \* ~ : ; < > ...」  
毎日メールが届く。入院患者のイメージとはほど遠く、体は至って健康な上に、栄養管理の行き届いた病院食に睡眠たっぷり毎日休養。ふだん家では、毎日深夜まで韓流ドラマに現をぬかす妻。時々覗いて「おまえ、またあ観とんのか」と言うのと、「あなたジャマ! 今いいとこだから、あっち行ってスミダ」とあしらう妻も、病院とあつては強制的に早い時間に寝かされ、その分早起きになる。「もー、おまえは早く起きて暇なモンだから、朝早うから長いメールを打ってくるなあ。どうせ暇つぶしやろ?」

「毎日、清潔にしてる? 洗濯機の使い方教えたでしょ、ちゃんと洗濯できてる?」洗濯機の使い方? フンツ、そんなモン教えてくれたつて上の空じゃ。男の一人暮らし、洗濯機なんか使わんでもいいように、ちゃんと秘策があるんじゃ。服、着なかつたらいいやん。

夏場の重労働、こんな妙案秘策にはうってつけ。住職が裸では来客の時に「アッ! お上人さん♥」では困っちゃうので、最低限の短パンとTシャツ。夕方、現場から帰ると、シャワー浴びながらしゃがんでゴシゴシお洗濯。頭と体に石鹸をこすり付け、そのままTシャツとパンツにもこすり付ける。毎日これで、OK!

「うん、ちゃんと洗濯してまっせえ。...ワイルドになあ」  
ある日電話をしてきた。なんだか声をひそめて話している。

折もあり、八月十二日と言えば、お盆の真っ最中。棚経もピーク。お寺の最大のイベント「施餓鬼法要」も間近に控え、準備に大忙し。また前述のように、お盆行事がすべて終わったら家族総出で引越しかかるうかと言う時に、妻は墓掃除をしていてコケちゃった。もともと足があまり丈夫じゃないせいもあるけど、ちよつとした捻挫と思っていたのに、だんだん足首が腫れてきた。

「これから忙しくなるのに、お医者さん行つとつた方がいいよね」と言うが、生憎の日曜日。「お父さん、新聞で当番のお医者さん探して」

診てもらって良かった。当番医は、骨にヒビが入っていると言う診たてで、明日専門医が出てくるから更に詳しく診てもらった方がいいと言う。翌月曜日に行く、手術した方がいいと言うので、さあ大変!

手術日までの十日間ほどは、「口は出すけど、仕事はしない」口先だけの女の鑑であった。両手に松葉杖の初日は、台所の流しの前に、「ここに椅子持ってきて」と腰掛け、やつと両手の自由が確保されたものの、

「冷蔵庫を開けて、アレ取って、コレ取って」

冷蔵庫を開けるが、「そんなモンないやん、冷蔵庫のどこにあんねんッ!」

「ソコの引き出しから、アルミホイル取って」

取って差し出すと、「それはキッチンペーパーでしょ!ちゃんと見なさいッ」互いにだんだん険悪になり、歩けなくて自分に腹が立つ女シエフはできの悪い生意気な料理人見習いに、包丁を振り回しながら矢継ぎ早に指示を出す。やつと食卓に着いたが、...無言。

ご飯も炊けない、味噌汁もつけない私は、もうイジになった。

「もう明日から、メシも炊かなくてもいい、味噌汁もいらんッ!」

コープで買い込んだ「さとうのごはん」をチンして卵かけご飯。「あさげ」にお湯を注いで味噌汁の「ハイッ! 出来上がりッ」と。

妻が入院すると、一人暮らしのまさしく男やもめ。なーにこの御時世、心配することはない。「さとうのごはん」と「あさげ」さえあれば、餓死することはない。生まれて初めてのワクワク感で、思わずニヤリ。更に、窮地に陥ったら知恵が湧くもので、「さとうのごはん」を茶碗に移さず、そのまま卵をかけん?

「あのさあお父さん、教子が私の下着を洗濯してくれて紙の袋に入れてリビングに置いてくれるから、お父さんが今度病院に来る時、持つて来てくれへん?」  
「なんで声ひそめてんねん」  
リビングに行ったら、件のモノが置いてあった。たったこれだけのモノ、大きな袋に入れる必要ないやん。私はさっさと件のモノを袋から取り出して、ズボンのポケットに突っ込み、バイクで病院に走った。

「あなた、持つて来てくれた?」  
「オウ」とポケットから出して差し出すと、妻は絶句。間を置いて、噴出した。

「エーッ? お父さん、私の下着、そのままポケットに入れて持つて来たん?」と笑いこらげてしまった。オレにしたら何でもないのに...

暇でしょ? がない妻は、事の顛末をネタにして言いふらしていたようだ。

後日、教子が来て私の顔を見るや否や、笑いをこらえながら「お父さんッ! お母さんのパンツ、ポケットに入れて病院に行ったんやて? 警察に停められて職務質問された時、ポケットからパンツ出てきたらどう言い訳すんの? 下着ドロボーのジジイやで」まるで、母親が子供を叱ってる言い方。

「かわいい花柄の小さなパンツやないし、フリルのいっぱい付いたTバックでもないし、大きなパンツやからいいやん」

「いや、そんな問題やなくて...」と、呆れかえっている。

「オレはやつてない、オレは無実だーあ。弁護士を呼んでくれ」

ヤツは、まだ他にもいろんな人に言いふらしているはずや、絶対。





「お父さんッ、まじめにやって！」  
いつもユカタ姿の、下町のゲージツ家・篠原某よろしく、私がいつも溶接しているのと思

くあしらって  
が迫ってくる。テレビのニュース  
りに煽り立てる。  
「ホレ、ホレ、もうすぐでっせ、奥さん何ぼやーっとしてはりまんねん。遮  
光グラス持つて、外に出なはれや。それやナイツ、茶碗とか箸とか持つて何し  
はりまんねん。そのもん置いて、タマが鳴いっとたかて、エサなんか後でよ  
ろしいやん。奥さん、落ち着きなはれや、あわてなはんや、ガス？ガスは止  
めた方がよろしいな。電気？テレビ？テレビは消さんといて、あ、消したら  
アカン、消し…」アナウンサーの「消したらアカン」と懇願絶叫する声  
も空しく、プツンと冷酷非道にも切られてしまった。  
そんな冷酷非道な妻は、手ぶらで、とにかく外に出た。何か代わりになるも  
のないかと思ひ巡らしていたらしく、浜村淳風に表現すると、その時本妻は、  
握った湯飲みをバツタと落とし、小膝たたい  
てニッコリ笑い「そうや、お父さんがいつも  
使っているアレ」と言った。  
妻が、いつものアレ貸してくれと言うもん  
だから、いつものコレか？と金槌を出してき  
たら、うんコレコレと言って頭をこづかれ、  
それじゃコレか？とノコギリ出してきたら、  
ソウソウと言って、柱を切りだす始末。  
「お父さんッ、まじめにやって！」  
いつもユカタ姿の、下町のゲージツ家・篠原某よろしく、私がいつも溶接しているのと思



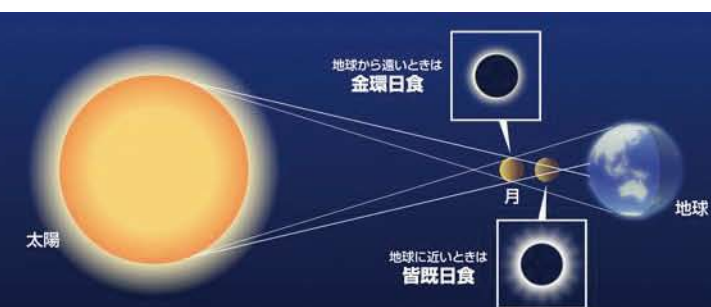
「どこか、売って  
へんやろか？」  
その日になって、そ  
んなこと言い出すも  
んだから、「バカ言っ  
ちやいけねえよ」と軽  
やった。だんだん時刻  
ではアナウンサーがしき

その年に入って、五月二十一日には歴史的天体ショー「金環日食」が見られ  
ると言う報道が連日のように流された。その天文学的解説はもとより、少し前  
から、「金環日食」を見るための作法が解説されるようになった。「昼というの  
に暗くなるから、夜になったと思って寝てはいけません」など…、んなあこ  
たあねえか。特に、絶対に無防備で直接太陽を見ないようにと、観測用グズ  
としてチョー濃い遮光グラスを推奨していた。商品としてのコマースナルなら  
ともかく、連日ニュースでもその品を取り上げるもんだから、バカ売れ。イン  
ターネットを見ても、ソレばっか。巷は「金環日食」と「遮光グラス」一色、  
いや二色と言うか、そんな風潮に妻は「あつ、そう」と少しは関心あるものの、  
さして準備万端歴史的なその日を楽しみにしていた風ではなかった。

いついたらしく、妻は溶接  
用の遮光面を貸してくれと  
言う。  
「ほんまや、アレが一番い  
いな」と、今度はボケない  
で素直に出してやった。  
もうすでに日食が始まっ  
て、ピークを過ぎようとし  
ている。  
「早よ早よ、終わってしま  
うやん！」もぎとるように溶接面を手にした妻は、それをかざして日食を  
観ようとしているが、遮光グラスの色が濃いせいか、なかなか太陽を掴み  
きれないでいる。  
「どこ？どこ？わからへん」  
「よこせッ！」と奪い取って、「ホレッ、ここじゃ」と渡すと、やつと確認  
できたようだ。  
「よう観えるわ、  
お父さん」  
それにしても  
ユッコ、溶接面の  
持ち方、ヘンだよ。  
三百年後の次の  
機会にも、ユッコ  
はここで溶接面を  
持つて太陽を探し  
まわっていること  
だろう。



写真右は、Web で配信され世界的に有名になった画像だと言う。ウチのユッコ（写真左）だって負けてねえぞ！



## 2012/5/21 世紀的天体ショー『金環日食』

昨年（平成 24 年）5 月 21 日、東京や大阪、名古屋など、太平  
洋側を中心とした広いエリアで、これほどの広範囲で見られる  
のは西暦 1080 年以来、932 年ぶりの出来事

例をみてみます。東京で前回見られたのは 173 年前の 1839 年  
9 月 8 日のことです。また、2012 年以降で次に東京で見られ  
るのは、ちょうど 300 年後の 2312 年 4 月 8 日のことになりま  
す。さらに、西暦 1 年から西暦 3000 年の三千年間に起こる全  
ての日食のうちで、東京で金環日食はたったの 8 回だけしか見  
られません。

日食とは、太陽―月―地球がほぼ一直線上に並んだとき、地球  
から見て月が太陽の前を通り、その一部または全部を隠してし  
まう現象です。いくつか種類がありますが、太陽と、見かけが  
それより少し小さい月がぴったりと重なって、太陽がリング状  
に見えるものを「金環日食」といいます。

「日食」とは、月が太陽の前を横切るために、月によって太陽  
の一部（または全部）が隠される現象です。

太陽が月によって全部隠されるときには「皆既日食（または皆  
既食）」と呼ばれます。

また、太陽のほうが月より大きく見えるために月のまわりから  
太陽がはみ出して見えるときには「金環日食（または金環食）」  
と呼ばれます。今回は日本の一部の地域でこの「金環日食」が  
見られます。

太陽の一部だけが月に隠されるときには「部分日食（または部  
分食）」と呼ばれます。





## 60の手習い、その①

この歳になつて、何十年かぶりに情けない思いをした。

本堂解体を自分の手でやることに決めて、あれこれ思いを巡らす。軽量鉄骨構造のプレハブとは言え、建てる時はクレーン車が来て、梁を吊っていた。同じようにクレーン車を呼んで吊ってもらったら訳ないのだが、「自分でやる」と言った手前、鳶住職の沽券に関わる。そうだ、自分でクレーン車を操作したらいいやんと、早速インターネットで教習所を探し通うことにした。なんと短絡的なことか。

学科教習の教室で生徒の点呼が行われた。教室を見回すと、あたりまえだが、二十代三十代の若者ばかり。初日とあつて、安全靴を履いた四十代とおぼしき教官は、お笑い芸人の「辻本茂雄」にそっくり。彼は自己紹介のあと名簿を見ながら「Aさんは〇〇工業か、Bさんは堺市水道局か、Cさんは△△運輸、ふむふむ……」と全員ではないが一通り確認したあと、「みんな、社命でここに来てんのやろ？学科は眠くなると思うけど、寝たらアカンぞ！」とかました。

学科教習が始まった。九十分間隔の休憩時間に、辻本教官は暇つぶ



け聞かせて下さい」だの、「お布施つてドルでもウォンでもいいんですか？ 北朝鮮ウォンはダメですよね」とか、「お寺さんて、メシ食うんですか？」「お寺さんて、息するんですね？」「お寺さんて、二足歩行なんですな」「お寺さんて、哺乳動物なんですな」

こうなるに決まっとるから、素性を明かさないうで、「年金暮らしの年寄りが家をリフォームするのに、金がかからないように、自分でボチボチ解体してみようと思つて……、それにはクレーンの免許が……」と話す。「ふむふむ、ちゃんと目的があつて来たんですね」と少し同情の素振りが垣間見え

ところが、だ。一通りの学科教習が  
終了して実技教習に入ると、様子が変  
わった。若い人達は、さほど。問題なく「ハイッ、次。ハイッ、つぎ」とスムーズに進んで行くが、私の番でつまづく。どうもうまく行かない。教官がイラついて語気を荒げる。

「お父さんッ、そうするんちゃう言うたやろ！ちゃんと聞いてへんかったんか？」

大勢の生徒が見守る中で叱責されると、立ちすくんでうな垂れ、気持ちが萎縮してしまう自分がわかる。こう言う自分を、なぜか冷静に俯瞰していた自分もいた。

へ人間、大衆の面前で、「お前はダメなヤツだ！ダメ人間だ！」と毎日罵倒され続けると、自分は本当にダメ人間だと思い込んでしまい、こうしてその人の言

や、と怒って帰りましたわ」

しするかのよう、指し棒を掌に軽くたたきながら私の席にやってきて、「お父さん」と話しかけて来た。一瞬、「えっ?」と思ったが、確かに「社命」で来ている若者連中に比べ、間違いないただ一人のお父さんである。自分では解らないが、みんなの目からすると、一人だけジジイの存在は違和感があるのかも知れない。

「お父さん、何でここに来たんですか？趣味ですか？いやね、みんな会社名が書いてあったけどお父さんだけ空欄やったんでね。お歳からしても、ああもう一線退いた人やろなあと思って。この前も一人いたんですわ、その人は結局不合格で、教官の教え方が悪いから」

こんなことがあつてか、仕事する上で必要になつた訳でもなく、趣味とか軽しい気持ちでやつてくるヒマ人に対して、いい印象を持っていないようだ。ジョーヒマ人、と落とされちゃかなわん。真摯な姿勢を示した方がいいだろうと判断し、探りを入れてくる教官に「実はですねえ」と。とは言え、「お寺の本堂を解体するのに……」と正直に語つたら、珍しい動



津々に好奇の目で  
見られ、質問の嵐が  
吹き荒れる事態にな  
ると予想がつく。

「ギエーッ! 住職さん? ちよつと教えてください、お釈迦さんて何宗ですか?」に始まり、「お経、ちよつとだ

いなりになってしまいうんなあ。これがマインドコントロールの入口か。実際、人様にできることが自分にできないはずはないとタ力をくくって挑んだはずだったが、能力の衰えをまじまじと感じさせられた。

翌日になっても同じようにつまづくと、多分不合格かもしれないなあと言う  
 思いが増幅するうち、最終日の修了試験を迎えてしまった。

「十四番、清水さん」

これまでは先生であつた辻本教官の顔が、今日は試験官となつて冷徹な顔に見えた。実技試験が始まり、決められた手順通り操作しながら試験官の顔をチラツと窺うと、「うん、そうそう、慎重に行けよ慎重にな、お父さん」と、出来の悪い生徒を思いやる顔に変貌していた、ような気がした。

すべて終わった。もうどうでもいいと、緊張感から開放された喜びしかなかった。

休憩の後、「カツ、カツ、カツ」と革の安全靴の音を立てて教室に入ってきて、「試験の結果を発表する」と告げた辻本試験官は、まだ厳しい顔をしている。

「一番、誰それ、合格!」「二番、誰それ……、」「十四番、清水さん、合格!」「エッ?私合格ですか?」と思わず叫んだ。

すべて終了した後、辻本教官は私の席にやってきて、「お父さん、ダメか思うとったん?」「そうですね、絶対不合格や思っていました」

それに続けて「ワシつて、優しいやろ？」とニヤけて語りかけてきた辻本ちゃん、フツの兄ちゃんだった。

JR関西線「久宝寺駅」で乗り降りするのも、最初で最後だろう。





## 60の手習い、その②

恥ずかしながら清水教信、齢61にして此の度、アマチュア無線従事者資格国家試験にチャレンジ致しました。

なんだか仰々しいが、早い話、ハム無線の試験を受けたと言う話。

どこの業界も同じだろうと思うが、阪神大震災以降世界的な大小の自然災害が続き、そして東日本大震災が発生したことに衝撃を受け、災害対策への関心が深まり、急遽真剣に取り組むようになった。仏教界、日蓮宗も例外ではない。そんな中私は、日蓮宗災害対策に関する委員としての立場、且つ日蓮宗兵庫県東部管区で災害が発生した場合、その対策に関して陣頭指揮を執らなければならない立場にある。でありながら、災害に対する見識、対策に関するノウハウなど、特別持っている訳ではない。

責任ある立場に置かれているからこそ、自分自身何ができるのか、何が必要とされているのか、どうすれば役に立つのか等、ネット検索したりして思い巡らしてみた。

あれもこれも何もかも必要なのだが、災害が発生すると同時に、みんな一斉に電話をかけ始める。とどうなるか、私達は経験しているが、すぐにパンクして通信不能に陥る。いちばん情報を知りたい、送りたい時に通信不能になる。

ネット情報によると、こんな時大活躍したのが、洋の東西を問わず、アマチュア無線だったと言う。

ちょっと興味を引いた。更に詳しく書き込みを読むと、「超便利なケイタイ真っ盛りの今、時代遅れの過去の遺物」と言った評価はその通りだが、震災を機に受験者が増加していると言う。これは役に立ちそうだ

が、オレにもできるかなあ？と調べると、小学校低学年の生徒も多く合格しているらしい。逆に、小学校低学年の生徒が多く合格するくらいの試験に、もしオレが落ちてしまったらカッコ悪くて外に出られへんやんと躊躇もしたが、意を決して受けることにした。

テキストをネット購入したものの、小学生のチビでも受かるんやったら屁のカッパや、と梱包を開きもしないでずーっとほったらかし。三日前になって「いくらなんでも、目を通すぐらいはしないと」と、テキストを開いて見た。丸暗記でいいと言うネット情報でタカをくくっていただけに、ページをめくると、チンプンカンプン。こりゃあイカン、明後日の試験なんか絶対ムリや、と焦って読み出したが、解るはずがない。途中で放り投げた。

受験料を払っているのもったいない、と言う理由だけで受験に参加するので、完全に消化試合。それでも、一縷の望み、ひょうたんから駒、棚からぼた餅を期待して、青天の霹靂があるかもしれない。

百パーセントではないが、そう言ってもいいくらい受験したことが記憶から消されていた。ある日妻が「お父さん、日本アマチュア無線なんたらからハガキが来てるよ」と私に差し出した。一瞬、あ、そうだったなと思い起こしたが、悪い結果は見たく無いと言う本能からか、「そのまま捨てといて」と言うと、妻は「見なくていいの？そんなら一応開くよ、いい？」と言う。「お父さん、合格と書いてあるけど、なにコレ？」聞きたくないと言う意識が働いていたのに、意外な思いもよらない言葉が耳に飛び込んできた。「エーッ!？」

真摯に一所懸命勉強した人が落ちたかもしれないのに、全く理解していない私が間違っ合格してしまった。こんな理不尽があっていいのだろうか。



## facebook 「いいね!」って、……なにが?

FaceBook さして興味を覚えた訳ではないが、今流行っているし、とりあえず登録しとこうか。必要最小限の情報を入力した。

「情報発信」。なんかカッコいいじゃん。時代の先端を走っている感じ。同じオジサンたち、単細胞的ですが、魅かれませんか?



ホームページはずっと前から作っているが、最新ツールの方が、より「情報発信」してるーッて感じ。より、「時代の先端をはしってる」ーッて感じ。

その中で、ブログって、なんかもっちゃりしてない? ツイッターって、なんか愚痴とかさ悪口とかさ、中傷とかばかり……のような、全く根拠のない思い込みで、フェイスブックを選んだワケ。

何も発信するものが無いのに、取りあえず始めたので、後が続かない。みんなどんなこと発信してるのかのぞいて見ると、こんなやりとり。

「今日、箸がころんだ、可笑しかったー」

「エーッ? いいな、いいな。フタシなんかさあ、アラフォーだけどさあ、箸が転んだ経験まだ一回もないよー。うらやましいなあ」

「オレよう、昨日よう、霊柩車見たけどよう、親指隠さなかったぜー、ワイルドだろうー?」

「エーッ? 大丈夫? 隠さなくて。スッゲーなあ。勇気あるよなあ。だけどさあ、お寺に行って、一度お祓いしてもらった方がいいよ、念のため」

「オイてめえ、親指隠さなかったぐらいで、自慢すんじゃねえよ! オレなんか、メシ食った後、すぐ横になってやったぜえ」

「あの方、食事の後すぐ寝たお兄さん、頭に角生えかかっていませんか? そんな危険なこと止めた方がいいと思います。子供たちがマネして、みんな牛になったらどうしますか、あなた責任持てるんですか!」

「ブロガーの皆さん、私ねえ、風の便りにい、ハチ

を箸で捕るスゴイ人がいるって聞いたことがあるんですけどあ、どなたか情報ありませんかー」

「そのことなら、オレも聞いたことあるなあ。なんかスゴイ人らしいぜ。オレも知ってるー」

「その人、知ってますよー」

「教えて、教えて」

「その人は、私のいとこのダンナのおじさんのヨメのいとこの他人になるらしいよ」

「バカがおまえは!」

うーむ、オレには付いて行けない。やっぱり肉体労働の方がスキ! ってんで、ほった

らかし。ただ名前を登録しただけのfacebookではあるが、先日、姪のマミちゃんから友達リクエストが届いたので、こう返信てしやった。

「私は熟女好みで、若い人には興味ありませんが、マミちゃんだけは特例として認めます」

FaceBookの事務局かなんか知らんけど、しょっちゅうメールが来る。

「お知らせがあります」とか「友達リクエストがあります」とか「この方々、お知り合いではありませんか?」とか。

もう、いいっちゅーの!

そう言う訳で、時々、誕生日おめでとうメッセージとか下さる友人知己には、ほんとにゴメンナサイ。





# 12.4 清水家の新たなページ

「ちゃんと浸かつたかなアカンで、風邪引くからな」  
「ウン！」

来年、小学一年生になる孫は、だいぶ聞き分けが良くなって、顔を真っ赤にしながらかマンして浴槽に入っている。

「ジイジイ、ぼく今日は、お泊まりに来たんと違うん？」

「そうや、今日は、ジイジイの家にお泊まりに来たんと違うんやで。ヒサトのお家はな、今日からここなんやで。今日か

らここに住むんやで」

「ふーん、そうなんや」

理解できているのかどうか、そんな会話をしながら、水泳教室で自信がついたのか、しきりに顔を水中に浸けて息を止めている。

「何秒潜っていられるか計ってやるから、ジイちゃんに見せてみい」と水を向けると、喜んで更に何回も潜ってみせる。

十二月四日引越しと決まってから、息子の家族はその準備に大わらわ。そんな中で、孫は何遍も耳にしたのだろう

「今度、木のお家に住むねん」と嬉しそうに周りに言いふらしていたと言う。

娘二人が嫁いで以来、づつと妻と二人暮らしだったが、その日から、二世帯住宅とは言え、いつぱんに大家族となった。

「あんたも、ここで住むの久しぶりやなあ」

「そうや、十八で東京に行ってから、ずつと外で住んどったから、ホンマ久しぶりや」

そんな妻と息子の会話を聞きながら、私はお風呂で孫としゃぐ新たな一ページとなった。



「清水所長、何書いてるんですか？」

兵庫県西部の大岩宗務所長が覗き込んできた。

宗務院ではいつも指定席が隣同士で、仲よしこよし。

「いつもの、アレ」

「あー、アレね」

「大岩さん、アレはどう？」

「アレね、……×やないけど△でしたわ」と、意気消沈げみ。

「アレ、二重丸やないの？」

「そうなんよ……。清水さん、アレは？」

「二重丸！」と意気揚々。

遠くの席からは、熊本の宗務所長ハマちゃんが声をかけてくる。

休憩時間のいつもの風景でした。

後日譚として、「大岩さん、その後アレは？」と訊くと、

パイプの煙をくゆらせながら、「◎！」と、ニンマリ。

それはよかった。

一万人の読者の皆さんには悪いけど、

大岩さんにしか解らない会話で、ゴメンナサイ。

## 晴工雨筆

どうもオレの前世は、肉体労働者らしい。外での作業が楽しくてたまらない。お天気が続くになりだす。十一月に入ると、なおさらタイムリミットが気になるが、それでも土方を優先してしまつた。

晴れた日に部屋に籠り、パソコンにかじりついていると、お天道様に申し訳ないようで、非常に後ろめたい気がする。久しぶりの雨の日。「ヤッホーッ！」何の気兼ねもなく編集に没頭することが出来る。

今回は、「工」に時間を費やしたために「筆」を運べず、気がついたら締め切り間近。「ウアーツ、どうしよう? 間に合わない」  
「そつだッ」と表紙に「一面、雪景色」の画像を掲載した。

きょうしん 078-511-9691  
kyoshin@jss-kobe.com  
http://otera.jss-kobe.com/

★《山のたより》は無料配布ですので、親しい方にも差し上げて下さい。制作費が高額になっていますので、100円カンパでご支援戴きましたら助かります。ゆうちょ銀行 14310-16423801 シミズ キョウシン